

九谷やきもの紀行

原 宏

第二三回大会が北陸で行なわれることに決まった昨年（今ごろ）私は地図を広げて、日本六古窯の一つとして知られる古越前の窯跡を訪ねようか、それとも彩画陶磁界に有名な古九谷の古里にしようかと迷っていた。そのうちに、会場は辰口町だということが知らされたので、大会の前日と翌日とを九谷焼探訪にあてることにした。

十月七日の昼すぎ、私は石川県江沼郡山中町九谷の窯跡に、白磁片と鉄釉の陶片を手にして、紅葉にはまだ早い、折から降り出した雨の中にいた。大聖寺川の溪流に沿った九谷の家々は静かに煙つて雨の中にあつた。なんの変哲もない、過疎の村としか見えないたずまいからは、ここが豪放華麗、卓絶した大胆な色絵の古里であろうとは、それと知らなければ信じがたいほどの秋景であつた。

発掘調査の結果からは、素地焼成の窯であり、上絵付を行なつたところではないと考えられている。よしんば、その場所が大聖寺城下であろうとも、平鉢に代表される古九谷の色絵は盛り上げるような施釉、赤を主調としないで黒線の骨がきとの調和で裝飾する上絵付が特徴であるが、その母胎を焼いたのはここであるし、すでに明暦元年には窯煙盛んであつたことも確かである。

形もさることながら、素地・絵付の強さにおいても、品格の点からいっても、古伊万里・柿右衛門・鍋島の比ではないという評価の賛否は別にしても、豪放華麗な図柄の多様な展開、千変万化の色彩

感覚は、これもリーチのいう中国の形、朝鮮の線、日本の色といった標語的指摘の当否は別として、色絵古九谷の名陶たることは疑いようもない。

しばし心遊んだ私の掌中には、黒味をおびた茶かつ色の鉄釉の陶片があつた。いわゆる吸坂手である。この陶片を手にして、来たときにとどった大聖寺川沿いを戻らずに、杉ノ水峠越しに今立に出て動橋川を下り、山代を経て吸坂小学校に向かった。

吸坂小学校の校長室、戸だなの上に鉄釉のつぼと花びんがあつた。「裕伊之助作」と書いてある。絵のことには疎い私でも、それが洋画の裕伊之助画伯のことだということはすぐに分かつた。

思いもかけないことであつたが、仕事中であるから十分か二十分くらいで良ければどうぞ、ということ、百メートルと離れていない踏廊を訪問した。すべて、自分もまだ会つたことがないという教頭さんの計らいであつた。

母屋も工房も、農家を移築した広々とした構えであるが、東京芸大退官後は吸坂焼に魅せられて、東京下町生まれの画伯は、ここに移り住んで焼きものの製作に余生をかけておられる。

肥前有田の山小屋窯出土の鉄釉白抜文磁片と吸坂手陶片を前にして、古九谷と初期伊万里とのかかわりを中心にひとしきり話はずみ、はては昭和二〇年代占領下の面壇の話、ピカソの話、もうこうなると話を聞くいっぽうで、聞く話のこととくが知らないことばかりであつた。時間もいつしか一時間半にも及び、玄関まで見送つ

てくださった画伯にお別れして、薄暗くなった雨の加賀路を大聖寺の町へ急いだ。

閉館まじかい加賀市歴史民俗資料館で、吸坂焼出土破片を見る。数こそ七点にすぎないが、九谷土で焼いたものと説明書きされた磁胎の染付が一点あった。私の古九谷採集品には、磁胎に鉄釉をかけたものがあり、もう一つ、焼き締まった薄手の陶胎で、精巧な作ゆきの鉄釉の茶碗らしきものの陶片がある。釉薬の点だけでなく、吸坂手古九谷と吸坂焼との関係は識者の言うとおり、今後の研究課題であろう。

十月下旬には、九谷焼を中心とする土と炎の美展を当館でやるので、吸坂小学校から借りているのだということであった。館長さんに教えられて、七日から小松市立博物館で、蓮代寺窯を中心にした青九谷の「藩政期の九谷諸窯展」を開いていること、さらに金沢の石川県美術館でも九谷焼「吉田屋窯名品展」を開催中ということが分かった。

せめて、古九谷と、もう一つ若杉窯跡ぐらいは見たいものだと思っていたのに、こういう二つの展覧に行き合わせるとは、願ってもない機会に巡りあえる喜びに、私は内心躍り上がらなばかりの思いであった。十日は駆け歩きをしなければと思っていたら、十日は体育の日で小松市博は休館日だと、翌日になって親切に電話で連絡してくださいました。

九日の朝、九谷諸窯展だけでも見ておこうと、早起きして出掛けた。市博に行くのと、先に若杉窯跡に案内して下さるとのことと、早速現地に向かう。この窯は文化八年の築窯で、小野・蓮代寺・佐野などの能美諸窯の先駆をなす九谷中興の祖窯として知られている。貫入の多い軟らかい素地に鮮やかな上絵付で、古九谷の美の再現をねらった色絵磁器も有名であるが、純白の焼き締まった染付でも知られ、世に「加賀伊万里」、「若杉伊万里」の名を得ている。

肥前の陶工本多貞吉が指導者となり、やがて阿波生まれの赤絵勇次郎も加わり、加賀藩窯「若杉陶器所」が成立した。窯跡は昭和四十七年に発掘調査が行なわれ、今は宅地になっているが、かき根や花壇のすみで、染付の芙蓉手鉢・牡丹文徳利・鳳凰文鉢・葡萄蔓草文鉢の破片が、半磁胎の盃や鉄釉瓶に混じって採集できた。染付芙蓉手が見付かったことは特にうれしかった。

予定の時間は過ぎたが、午後は腰をすえて青九谷の展覧にあてることにした。青九谷と言うが、緑・黄・紫・紺青を所狭しと彩釉して、けんらんたるものがある。若杉・吉田屋などは絵を身につけた陶工が描き、幕末と明治期になると素人が絵手本を見てかき、絵が生きていないという傾向が見られる。

ちなみに、会場で知遇を得た日本工芸会会員の宮川哲治氏の話によれば、九谷焼では「塗る」と言わず、「置く」と言うそうであるが、浮き上がったように盛り上げ、置き上げて、釉層が分厚いのである。中国で堆花・堆器というのに当たるのだらう。塗ると言うなら、まさに「塗埋手」の青九谷である。

開会にあたって、なに食わぬ顔で来年度大会への勧誘の辞をのべたが、この日の私の不在は、とつくにばれていたらしい。もう一晚を過ごすことになった会員の中に、岩本由輝会員や高橋明善会員がいて、不在の事の次第を話さざるを得なくなり、ついにはこの「九谷やきもの紀行」を送らねばならない羽目になったのである。

翌十日、町長さんの紹介で、卸問屋と絵付工場を営んでいる鶴田陶器Kを訪問した。岩本会員や高橋会員は茶碗・酒器を記念に買い、二宮哲雄会員たちと金沢へ向かった。これから後は私と服部治則会員とが行を共にする。社長さんに宮本酒造店まで送っていたでいて、同家の「吉田屋窯色絵松竹梅図鉢子」を拜見する。「婦人里作、面黄采・黄彫」と書き、ふた裏にも角福銘がある。黄彫とは小松の鍋屋丈助のことで、人物花鳥面に秀でていた絵付師である。ほかにも数点見せていただいたが、印象に残ったものに「染銅宝尽くし文平鉢」がある。高台内に「柿」の銘があり、古伊万里柿右衛門系であることが分かる。

小松市に出て、宮川氏を訪ねると、まず出雲菜山焼の伊羅保写し茶碗で一服頂戴。仕事場に案内されて絵の具の調合法、筆の使い方などを教わる。ふのりを入れて溶いた絵の具（釉薬）を細筆ですくつてのせるようにして穂先に含ませ、それを器面に置くような要領で塗る。ふのりの粘着力のために細長い穂先に含みやすく、同時に穂先から離れやすいのである。これが分厚い釉層を盛り上げていく九谷の塗り埋め、塗りつぶしの肝どころであり、伊万里や瀬戸の太く長

いダミ筆とは対照的である。

駅まで見送って下さった宮川氏と別れて、金沢に向かった。

金沢駅から、石川県美術館の「吉田屋窯名品展」に直行する。

この窯は、文政七年に古九谷窯の物原（陶片の捨て場）に開窯され、大聖寺町の豪商吉田屋伝右衛門によって経営されたため、この名がある。翌々年には利便を求めて、現在の加賀市山代に移った。錦窯に粟生屋源右衛門、絵付に鍋屋丈助などの名工がいて、広く民需にこたえ、青手古九谷の復興を目指して、青九谷の平鉢を得意とした。文様は文人画に素材を求めた人物画から動植物、吉祥文と幅広く、釉薬は緑・黄・紫・紺青の四彩であるため、青海波などでも黄釉で塗りつぶすといった具合である。骨がきは黒の細線で、上絵付は分厚く盛り上がるように置かれる。古九谷のような威厳はないけれど、軽快なタッチといささかの俗っぽいゆえに、かえって町人の生活文化の美に親しく接しているような潤いさえ感ぜられる。径四〇センチメートル近い青九谷の「万年青図平鉢」は、緑・紫・紺青でおもとを描き、地釉は黄で塗りつぶした代表的作品で、肩を張らないで見ることができた。

一巡して、最後に幾つかのめばしい作品をもう一度見ようと思つたところ、守衛さんがいやにせき立てる。退場を促すのだろうかと思つたら、そうではなかった。別室に常設の古九谷もあるので、それも見てもらいたいという配慮であることが分かった。そこを見終わ

ったところでベルが鳴り出した。いささか慌てぎみに退館しようとした私たちに、別の守衛さんが特別室を見るように勧めてくれた。飛び込むようにして入った私は、一瞬声にならないような声を出したように思う。そこには一点、当館御自慢の国宝「仁清色絵雄子香炉」があつた。仁清傑作の実物大の香炉である。仁清の優れた彫塑の感覚と技能が最高度に發揮され、繊麗な賦彩によつて写実的な実物大につくる作風は、陶芸の道に新しい分野を開いたといわれる。

九谷焼のすばらしさを知り、県美術館を郷土の誇りに思っている守衛さんたちは、時間にはなつても、どうしても見ていつてもらいたいという心づかいをしてくれたのだろう。優れた美術は人の心を豊かにする一例をかいま見たような気がして、感銘をうけた。

服部会員と別れて、私は夜行の臨時特急で金沢を離れた。

図録類を見ながら、九谷の山里に始まり、石川県美術館に終わった幾日かを振り返つてみた。

四彩と言いながら、緑が印象強く、作品の色調が全体として青く見える青九谷はもちろん、赤を加えた五彩の場合でも、分厚い緑釉がその暈（面積）の多少にかかわらず、主調の意味を訴えかけてくる。色絵陶磁の中で、これほど緑を強調するものが、九谷のほかにあるだろうか。

九谷焼といえ、詩文細字の密画や青粒、それに彩色金襴などが本流であるかのように思う人もあるらしいが、これらは明治から大正にかけて盛んにつくられ、海外にも広く輸出されたものであり、

時代の趣味と商業化の反映だったのである。

いつまでも目がさえていたのは、濃密な九谷焼行脚のため、いささか興奮ぎみだったのかもしれない。

十月十二日、逗子の有賀先生宅に伺う。

いつもに変わつて、書院の違いだに九谷とおぼしき香炉がおかれています。九谷焼の旅を終えて立ち寄ろうとする私への温かい御配慮からで、古九谷のイミテーションだが良く出来ているだろうと言われた。

村研の様子をあらかた報告したところで、もどかしげに土産話をとうながされ、展観の図録を開き、陶片を取り出した。話が進めば進むほどに、私などは少しの知識は得たものの、審美眼の高さにいたっては、とても先生のひざ元にも及ばないことを感じながらも、やきもの談義は尽きなかつた。

そのうちに、台所から赤絵細描と詩文細字の杯を持つてこられ、信州の田舎でも明治ごろは、親方衆の家では使っていたものと話された。古九谷の図録や陶片を見たあとだけに、なんだか奇妙な気がして、先生も私もしばし笑いが止まらなかつた。ついには、夕食にはこれで一杯やろうということになった。先生は明治の親方を地でいける方だが、こちらは親方衆の飲み心地はいかばかりであつただろうかと、想像を巡らすのが関の山であつた。

畚画伯にいただいた鉄釉花瓶に生けた白小菊を見ていたら、有賀先生がつくつてくださったみそ汁の香りが、ふとよみがえつた。